

令和元年6月22日現在

機関番号：14303

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15H03169

研究課題名(和文)近代京都の美術・工芸に関する総合的研究-制作・流通・鑑賞の視点から-

研究課題名(英文) Comprehensive Study on the fine arts and crafts of modern Kyoto-from the point of view of production, distribution and appreciation

研究代表者

並木 誠士 (NAMIKI, SEISHI)

京都工芸繊維大学・デザイン・建築学系・教授

研究者番号：50211446

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、明治・大正時代の京都における美術・工芸を制作・鑑賞・流通という三つの視点から総合的に研究するもので、美術史・工芸史に加えて、歴史・建築史・庭園史などから検討を加え、とくにその近代化の様相について明らかにするものである。具体的には、制作を指導する教育システムの確立、美術・工芸に関する雑誌の刊行とその影響、図案の懸賞募集、海外の美術・工芸の紹介、展示の場の確立などの様相を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の意義の第一の点は、明治・大正時代の京都における近代化の様相を、多くの新出資料の紹介と分析を通して明らかにしたことである。とくに、これまで紹介・分析されてこなかった雑誌や短期間で廃刊になった雑誌、注目されることのなかった図案集や図案募集などの分析をおこない、その意義を明らかにした。また、近代京都の美術・工芸をめぐる人的ネットワークについても、あらたな視点を提供することができた。とくに、美術史・工芸史に加えて、歴史、建築史、庭園史などの視点を加えることにより、これまで指摘されたことのない交流の様相が明らかになった。

研究成果の概要(英文)：In this research, we comprehensively studied art and crafts in Kyoto of the Meiji and Taisho eras from three viewpoints of production, appreciation and distribution. We examined from the viewpoints of history, architecture history, garden history, etc. in addition to art history and craft history. The main task was to clarify the aspect of modernization of art and craft. Specifically, we clarified the aspect such as establishment of educational system to instruct production, publication and influence of magazines on art and crafts, recruitment of design awards, introduction of overseas arts and crafts, establishment of exhibition place, etc.

研究分野：日本美術史

キーワード：近代化 京都 美術・工芸 図案 美術教育 美術商

様式 C-19、F-19-1、Z-19、CK-19（共通）

1. 研究開始当初の背景

日本の近代美術についての本格的な研究は、1989年に刊行された北澤憲昭『眼の神殿』（美術出版社）を嚆矢として、佐藤道信『〈日本美術〉誕生 近代日本の「ことば」と戦略』（講談社、1996年）同『明治国家と近代』（吉川弘文館、1999年）など1990年代に活発になっていった。そこでの中心的な関心事は、明治政府の方針として、「美術」やそれを取り巻く諸制度が整備されてゆく過程の検証であり、そのことと現代の美術史研究とのかかわりであった。そして、そうである限り、話題は明治政府＝東京を舞台とする傾向が強かった。一方、同時期には、国公立さまざまな美術館・博物館で近代美術を主題とする展覧会が開催されるようになって、近代の美術を研究の俎上に乗せる準備が整ってきたといえる。

このような1990年代以降の研究動向のなかで、代表者および研究分担者は、京都の近代に焦点を当て、科学研究費基盤研究(B)共同研究、京都大学人文科学研究所共同研究などをおこない、東京とは異なる特殊な京都の近代について、多角的な研究をおこない、その成果をいくつかの編著書、論文により発表してきた。

このような研究の結果、京都の美術・工芸の近代化を考えるにあたっては、制作・流通・鑑賞それぞれの場の動向を個別的に研究したうえで、総合的な視野からまとめるべきであること、また、その際には、美術史・工芸史を専門とする研究者だけでなく、歴史、都市史、建築史、庭園史、産業技術史、デザイン史などさまざまな立場の研究者との共同研究が必要であることが明らかとなった。

2. 研究の目的

本研究の目的は、明治時代の京都における美術・工芸を、(1)制作、(2)流通、(3)鑑賞という三つの視点から分析し、京都における美術・工芸の近代化の実態を明らかにすることとした。具体的には、作品研究、作家研究に加えて、(1)制作については、近代の特性としての学校教育や化学的知識の導入などを、(2)流通については、博覧会や雑誌メディアなどを、(3)鑑賞については、生活空間の変化や趣味の問題などをも視野に入れて、多角的な観点から近代京都の美術・工芸の展開を明らかにすることを目的とした。また、近代京都の美術・工芸については、いまだに十分な紹介・分析・研究がなされていない作品や資料、人物がいることが申請までの研究で明らかになっていたので、それについてもできる限り共同研究の対象とすることを目的とした。

3. 研究の方法

研究の方法としては、以下の4点を基本とした。

- ①代表者、分担者、協力者による共同での作品調査
- ②未紹介資料（雑誌等）の研究による紹介・分析・位置づけ
- ③代表者、分担者、協力者の所属機関における展覧会の開催と、それを通じた資料の発掘・紹介
- ④研究会の定期的な開催による意見交換

4. 研究成果

研究成果としては、代表者、分担者、協力者による論文、学会発表、著書等で個別におこなっているほか、下記の三冊の著書で共同研究の成果を発表した。以下、それぞれの著書の紹介により研究成果とする。

- ①『図案からデザインへー近代京都の図案教育』（並木・松尾・岡著、淡交社、2017年）

本書では、京都高等工芸学校（京都工芸繊維大学の前身）と京都市立美術工芸学校（京都市立芸術大学の前身）それぞれに所蔵されている、明治から大正時代の生徒作品を分析することにより、伝統的な図案から次第にデザインへと展開してゆく道筋を明らかにした。これまで紹介されることのなかった生徒作品を図版で示し、その意義を論じたもので、今後の当該分野の研究にも資するものとなった。

- ②『京都 近代美術工芸のネットワーク』（並木・青木編、思文閣出版、2017年）

本書は、本科研のメンバーの共同執筆になるもので、近代京都の美術工芸を巡るさまざまなネットワークを明らかにすることにより、これまで指摘されることのなかった人物の業績や作品の存在を明らかにした。なかでも、ワグネルをはじめ中澤岩太、鶴巻鶴一、藤江永孝らの化学者が果たした業績を明確に示した点に大きな意義がある。

- ③『近代京都の美術工芸ー制作・流通・鑑賞』（並木編、思文閣出版、2019年）

本書は代表者、分担者、協力者による研究会での発表など成果をまとめて論文集である。各論文の内容は以下ようになる。

並木「浅井忠とパリー近代日本における芸術家の転身をめぐる考察」は、東京美術学校の教授から、1900年のパリ万博視察を経て明治35年に京都高等工芸学校図案科の教授として赴任

することになる浅井忠（1856-1907）の、ある意味で転身と言ってもよい変化の理由をパリでの体験に求めた。早くから洋画を志して「近代」を先取りしていると自負していた浅井が、西洋画の本場に行き、みずからの表現に絶望したことを確認しつつ、アール・ヌーヴォー全盛のパリで見た図案制作に新たな近代的側面を見出したことこそが変化の要因であったと指摘した。

実方「木島櫻谷の写生縮模帖—近代京都における日本画の学習と制作」は、京都で活躍をした木島櫻谷（1877-1938）が残した「写生縮模帖」（公益財団法人櫻谷文庫）の全貌を詳細に紹介することを通して、今尾景年に師事した初期段階からの櫻谷の絵画修行の過程を明らかにした。この作業を通して、当時の京都における運筆重視の指導や如雲社などの場を利用した新古画の縮模の様相、そして、なによりも写生を積極的におこなう櫻谷の姿勢を示すことができた。また、モチーフとしての虎を例に、本画制作にいたる表現の変化を示し、結果として櫻谷が本画制作の段階で写実表現を意図的に抑制している点を指摘した。

植田「太田喜二郎研究序説—その画業と生涯—」は、明治から大正期に京都の洋画壇で活躍をした太田喜二郎（1883-1951）の東京美術学校時代、ベルギー留学時代を経て京都で活動するようになって以降の年譜的な事項を確認し、そこに画風の展開を重ね合わせて論じた。そのうえで、作風の分析や歴史学者、考古学者、哲学者などとのネットワークの様相を明らかにした。

木立「河井寛次郎と京焼の生産システム—登り窯を「受け継ぐ」意味—」は、河合寛次郎（1890-1966）の言説を辿り、河合の京都や戦争とのかかわりを分析した。道仙化学陶器所文書、藤平陶芸文書の精査を通して、登り窯の衰退や貸し窯の実態、五条坂における民藝陶芸制作の様相などが明らかになった。また、窯の廃絶など現代社会において近代美術工芸遺産が直面している問題を指摘した。

青木「京都における染織工芸の近代化—写し友禅・機械捺染・墨流し染—」は、京都の染織業界が伝統的な製法から徐々に近代化する過程を分析した。具体的に取りあげたのは、写し友禅、機械捺染、墨流し染であり、ここでは、中村喜一郎、廣瀬治助、堀川新三郎、太田重太郎、武田周次郎、八木徳太郎などこれまで無名の個人としてしか扱われていなかった技術者、企業主などの役割、意義を指摘した。

上田「水曜会をめぐる考察—竹内栖鳳塾における明治三〇年代後半の新動向—」は、竹内栖鳳（1864-1942）門下の画家グループが結成した「水曜会」（明治36年～40年）の実態を明らかにした。栖鳳と弟子たちとの関係や、相互の制作を巡るやりとりを明確に指摘した。そのなかで、西洋美術受容のあり方、東京との比較意識など、グループが京都画壇確立の方向性を先駆的に試みた様相が示した。機関誌『黎明』の分析、展覧会出品作品の分析もおこなった。

和田『『小美術』—その分析と西川一草亭の果たした役割』は、杉林古香（1881-1913）、津田青楓（1880-1978）、西川一草亭（1878-1938）という若い三人が結成した「小美術会」とその発行誌である『小美術』（明治37年）を詳細に分析して、『小美術』を若い三人が京都の伝統工芸界に突きつけた挑戦状と位置づけた。また、三人の図案観、浅井忠とのかかわりを論じたうえで、美術家とは一線を画する華道家としての西川一草亭の立ち位置を明らかにした。『小美術』の特質には一草亭が大きな位置を占めていると同時に、その熱意が早期の廃刊の引き金になったと指摘している。

松尾「京都市立美術工芸学校の教育（課程編）」は、京都の産業界や行政の期待を受けて明治13年に開校したわが国最初の公立絵画学校である京都府画学校から京都市美術工芸学校への教育課程の変遷を追いながら、そのなかで「図案」が次第に重要視されてくる動きを指摘した。そのうえで、近代京都の美術教育が学校（教養）と画塾（専門）によって推進されたという特性を指摘して、東京との相違を明確に示した。

山本「美術貿易黎明期の京都とロンドン—美術商池田清助とトーマス・ラーキン」は、著名な山中商会以前に、美術商として海外との交流をもった池田清助（初代 1839-1900・二代 1861-1918）とその周辺にいた稲田賀太郎（1868-?）とトーマス・ラーキン（1848-1915）という2名の事跡を克明に追跡することにより、明治・大正期の日本美術の海外への流通の実態を明らかにした。とくに、電気技師としてイギリスから雇い入れたお雇い外国人であり、帰国後に美術商となったラーキンの業績を具体的にはじめて紹介した。

藤本「谷口香嶠の模写と画譜出版」は、日本画家であり、また、図案制作に注力をした谷口香嶠（1864-1915）の工芸図案についての考え方を、古器物の図案集出版に着目して分析した。最初の画譜『工芸図鑑』（明治24年）以来香嶠が積極的に進め、その特徴ともなった古代模様の普及が、当時の図案集刊行の主目的であった工芸図案の改良に加えて、東京に比べて振るわなかった京都の歴史画への参考資料の提示という側面が強かったと指摘する。

前川『『時事漫画 非美術画報』（1940年刊行）にみるカリカチュアと図案』は、洋画家であり、浅井忠のあと関西美術院院長になった鹿子木孟郎（1874-1941）が中心となって創刊した『時事漫画 非美術画報』（明治37年）を分析した。この雑誌の報告自体がこれまでなかったが、それだけでなく、ここで展開される戯画的表現が図案へと展開していることを指摘した。

加茂「明治期京都における染色デザインの展開—友禅協会応募図案を中心に」は、京都にお

ける最初期の図案団体であり、図案家の育成もおこなった友禅協会（明治 25 年）が実施した図案募集の様相を明らかにし、それを通して、この組織の特色を読み解き、そこから近代京都の図案のあり方を分析した。とくに近年発見された入選図案を紹介して、京都市立美術工芸学校や京都高等工芸学校という教育機関でそれらが図案指導に活用されていた可能性を指摘した。

岡「明治期京都における教育機関への海外デザインの導入—図案集を中心として」は、京都高等工芸学校が明治 35 年に開校当初から購入していたヨーロッパの図版および図案集に着目をして、それらの図案、情報が流通する過程とどのように受容されたかを分析した。海外デザインの導入と図案科のカリキュラム、とくに模写教育とのかかわりが指摘した。

高木「小波魚青「戊辰之役之図」と明治維新観」は、近年発見された小波魚青「戊辰之役之図」の画面を詳細に分析することから、幕府擁護から討幕へと揺れる宇和島藩とその絵師小波の位置づけを指摘した。

中尾「雑誌にみる近代京都の美術工芸—黒田天外の『日本美術と工芸』をめぐって」は、京都における美術ジャーナリズムの代表的人物である黒田天外が編集・発行した『日本美術と工芸』（明治 44 年）を紹介し、それが当時の工芸鑑賞のどのような点を浮彫りにしているかを分析した。『日本美術と工芸』についてはじめての紹介論文である。ここでは、展覧会の問題、図案への関心などジャーナリストの目で捉えた当時の美術界の様相を示し、また、美術と工芸が渾然一体となっている京都の特殊性を指摘した。

三宅「京都商品陳列所と明治末京都の美術工芸」は、明治 42 年に設立された京都商品陳列所の意義と意味を分析し、それが他府県のものとは異なり、参考品を見せるだけではなく、制作指導もおこなうなど美術工芸寄りの活動をしていることを指摘し、併設された庭園が京都の造園事業を示すものと位置づけた。

田島「土田麥僊の画室建設と材木商塩崎庄三郎」は、京都市立芸術大学が所蔵する材木商塩崎庄三郎関係資料のなかから、土田麥僊（1889-1936）のアトリエ建設を巡る手紙類を詳細に報告して、画家とパトロンとの関係を論じた。とくに、小野竹喬、榊原紫峰との関係も含め、国画創作協会創立（大正 7 年、1918 年）前夜の麥僊周辺の様相を指摘した。

中川「武徳殿の建設と国風イメージの波及」は、明治 32 年に大日本武徳会が藤原時代風で建設し、全国の武徳殿のモデルとなった京都の武徳殿が大正 2 年に改修された際に「桃山風」の要素が加えられたことを指摘した。そして、それまで支配的であった「藤原＝国風」に加えて、この時期に、桃山風の意匠が「もうひとつの国風様式」として建築に採用されるようになった実態を具体的に指摘した。

矢ヶ崎「茶会の場の考察」は、近代における茶室の変化、つまり、茶室の近代化の促進に美術商が大きな役割を果たしたことを指摘した。さらに、大正 10 年の東山大茶会の分析を通して、古民家の古材や石へのこだわりなど、美術商に加えて、大工や庭師もまた、この時期の茶室形成に重要な役割を果たしていたことを示した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 19 件）

- (1) 三宅拓也「明治維新と都市—第 1 回京都博覧会による都市整備」『危機の都市史』（2018）
- (2) 青木美保子「伝統の染織工芸に関わる産学連携プロジェクト—その活動の意義を考える」日本家政学会（2018）
- (3) 青木美保子「京都における染色産業の技術革新—写し友禅と機械捺染に注目して」日本繊維製品消費科学会誌『消費科学』（2017）
- (4) 青木美保子「近代京都における捺染産業の発展—ロール彫刻業に注目して」日本風俗学会誌『風俗史学』（2017）
- (5) 和田積希「フランツ・シュッテトナー博士作成のガラススライドの意義について—京都工芸繊維大学美術工芸資料館所蔵資料を中心に」意匠学会誌『デザイン理論』68 号（2016）
- (6) 山本真紗子「伝統産業における分業の功罪—立命館大学友禅着物プロジェクトを通して」意匠学会誌『デザイン理論』68 号（2016）
- (7) 並木誠士「初期韃靼人図について：流書手鑑にみる李安忠をてがかりに」『大和文華』130 号（2016）
- (8) 木立雅朗「京都の土と窯—発掘現場から見た伝統工芸と京都の土と石の関係」『立命館文学 河角龍典教授追悼記念論集』（2016）
- (9) 並木誠士「油彩からの撤退—浅井忠の場合」蜷川順子編『油彩への衝動』中央公論美術出版（2015）
- (10) 上田文「土田麥僊 齋田元次郎宛書簡について」『佐渡郷土文化』138 号（2015）
ほか 9 編

〔学会発表〕（計 12 件）

- (1) 青木美保子「近代京都のろうけつ染め－鶴巻鶴一による藤纏の復活とその後の展開」日本風俗史学会（2017）
 - (2) 加茂瑞穂「Examination from Dyeing and Weaving Historical Sources: A Focus on Katagami and Designs」（2017）
 - (3) 実方葉子「Lifting the veil: An examination of the Koryo Buddhist painting Water-Moon Avalokitesvara during its restoration」Forum on Advanced Materials Science and Technology for Cultural Assets, IUMAS-ICAM 2017（2017）
 - (4) 木立雅朗「五条坂京焼登り窯の民俗考古学的調査」日本考古学協会総会（2017）
 - (5) 加茂瑞穂「型紙データベース構築から活用に向けて」国際ワークショップ「学術資料としての『型紙』－資料の共有化と活用に向けて」（2016）
 - (7) 山本真紗子「工芸を世界に発信する－グーグル・カルチュラル・インスティテュートを例に」意匠学会大会（2016）
 - (8) 山本真紗子「Innovative Strategies in Dealing Japanese Art: Ikeda Seisuke, Yamanaka & Co. and their Overseas Branches(1870s-1930s)」International Symposium “All the Beauty of the World The Western Market for non-European Artefacts(18th-20th century)”（2016）
- ほか 5 件

〔図書〕（計 11 件）

- (1) 山本真紗子ほか『MADE IN JAPAN 日本の匠：世界に誇る日本の伝統工芸』IBC パブリッシング（2018）
 - (2) 並木誠土編『近代京都－制作・流通・鑑賞』思文閣出版（2018）
 - (3) 中川理『近代日本の空間編成史』思文閣出版（2017）
 - (4) 並木誠土・和田積希『日本のポスター 京都工芸繊維大学美術工芸資料館デザインコレクション 3』青幻舎（2017）
 - (5) 並木誠土・松尾芳樹・岡達也『図案からデザインへ－近代京都の図案教育』淡交社（2016）
 - (6) 並木誠土・青木美保子編『京都 近代美術工芸のネットワーク』思文閣出版（2016）
 - (7) 高木博志ほか編『講座明治維新 明治維新と宗教・文化』有志舎（2015）
- ほか 4 件

〔産業財産権〕

- 出願状況（計 0 件）
- 取得状況（計 0 件）

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究分担者

中川理 NAKAGAWA Osamu

京都工芸繊維大学 デザイン・建築学系 教授
60212081

矢ヶ崎善太郎 YAGASAKI Zentaro

京都工芸繊維大学 デザイン・建築学系 准教授
90314301

三宅拓也 MIYAKE Takuya

京都工芸繊維大学 デザイン・建築学系 助教
40721361

和田積希 ※文化遺産教育研究センターが時限により廃止されたため二年目以降は協力者
WADA Tsumiki

京都工芸繊維大学 学内共同利用施設等（文化遺産教育研究センター） 研究員
50746112

上田文 ※文化遺産教育研究センターが時限により廃止されたため二年目以降は協力者
UEDA Aya

京都工芸繊維大学 学内共同利用施設等（文化遺産教育研究センター） 研究員
30600291

加茂瑞穂 KAMO Mizuho

京都工芸繊維大学 研究戦略推進本部 特別研究員
70705079

田島達也 TAJIMA Tatsuya
京都市立芸術大学 美術学部 教授
40291992

松尾芳樹 MATSUO Yoshiki
京都市立芸術大学 その他部局等（芸術資料館） 学芸員
80728105

山田由希代 ※出産・育児休暇等のため二年目以降は協力者
YAMADA Yukiyo
堂本印象美術館 学芸課 学芸員
90600271

実方葉子 SANEKATA Yoko
公益財団法人泉屋博古館 学芸課 学芸課長
40565587

佐藤敬二 SATO Keiji
京都精華大学 デザイン学部 教授
00434738

木立雅朗 KITACHI Masaaki
立命館大学 文学部 教授
40278487

山本真沙子 YAMAMOTO Masako
立命館大学 文学部 講師
70570555

青木美保子 AOKI Mihoko
京都女子大学 家政学部 准教授
80390102

中尾優衣 NAKAO Yui
独立行政法人国立美術館・京都国立近代美術館 学芸課 主任学芸員
00443466

高木博志 TAKAGI Hiroshi
京都大学 人文科学研究所 教授
30202146

(2) 研究協力者

洲鎌佐知子 SUGAMA Sachiko

植田彩芳子 UEDA Sayoko

藤本真名美 FUJIMOTO Manami

岡達也 OKA Tatsuya

前川志織 MAEKAWA Shiori